

放送人の会

No. 26
2006. 1. 20

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階
Tel&fax 03-3221-0019 Mail info@hosojin.com
代表幹事 大山勝美 編集担当 伊藤雅浩、松尾羊一

二〇〇六年年頭所感

大山 勝美

昨年の放送界は市場原理を背景に、IT産業から鋭く参入を迫られ、放送の公共性とは？が騒がしく問われた年でした。

当会でも七月二日に立教大学で公開シンポジウム「放送の公共性とは何か？」を開催し、さまざまな立場のパネリストからの活発な発言でもありました。

日韓中テレビ制作者フォーラムは昨年度のビッグイベントでしたが、暮れによく運営関係者の打ち上げを四谷で行いました。評価と反省などそれぞれの発言が終り、第二部は、フルート伊藤雅浩、ピアノ磯村健二コンビの合奏を皮切りに一気にカラオケ大会へとなだれこみ。これがまた皆さん、持ち歌が豊富で、マイクの生かし方、体の使い方、声の震わせ方が個性的でその達者ぶりには驚きました。

私は放送人の会を「SKKの会」と言っています。S―親睦、親交にはカラオケが一番と今更のように実感した次第です。もともとKは研究、交流、もう一つのKは啓蒙、顕彰で、昨年はさらに「建白」と「国際交流」のKが加わったように思います。

川口幹夫名誉会長の聞き書き「時代の表現者」(読売新聞・連載)が二十一回で終わりましたが、その中で日本のラジオと同年の川口さんはテレビはジャーナリズムであり、放送文化でもあり、僕の人そのもの」と語っています。その業績は日本の輝かしい「テレビ文化」の発露だと感じ入りました。



右は、福島県古殿町八幡神社境内の狛犬。昭和七年建立。作・小林和平

当会の会員は、主に六十歳台から八十歳台まで放送現場を中心に活躍された方が多いと思います。高度成長を推進し、豊かな大衆消費社会を実現したのは「テレビ文化」だったので。

テレビは日本に自由と平等の「戦後民主主義社会」を建設する社会資本として期待され、番組はそれに応えてきました。私たちは対等に自由に発言し議論し、新しい活気あるテレビ文化をつくらうと志を持ち、汗を流してきました。

「戦後日本興隆の中核を支えたのはテレビだった」。そのことを私たちはもっと胸を張って誇りに思うべきでしょう。堂々と「検証」し、戦後民主主義の財産として「継承」すべきだと思います。

足元を見ますと課題を抱えたままです。「NPOの組織に変えたい」「若い次世代会員の参入を」「地域会員との積極交流を」「会員同士の気軽な参加催しを」「放送関連諸団体や機関、組織とのパートナー連携を」などなのです。

さなきだに今年には幹事改選期にあたります。代表幹事の交代を含めて、パワフルな幹事グループの誕生が期待されます。犬のように安産でワンダフルな年度になりますよう、心から願っています。

「放送人の会」の着地点を探る

現場の可能性を見守りたい

中澤忠正

放送人の会はOB・OGですね。

いや、現役で働いている人はいるとはいる。が、我々の多くはOB・OG。

放送という生々しい世界のことを前向きに考えていこうとするとき、そんな古手に役割なんてあるかい、と言われかねない。しかし、厳然としてそれはある、と私は確信しています。

放送というのは、視る側の人も一緒にやって作り出してこそ……とまでは行かずに、その手前の話です。

我々世代の多くは「放送」(……)といふとき、私のイメージはついテレビのことになってしまいますが、お許しください)の草創期に立ち会っていません。何が何だかわからず、指針も手本もなく、手探りで「テレビ」の世界を作り出したのです。そしてそれからウソ十年、テレビ世界は立派に構築され、殿堂として完成している、かのように見える。しかし実はそれは多くの可能性の中で、たまたま成立してきた一つのカタチでしかないのだ。そのことは

創成期に立ち会ったOB・OGたちにはよくわかる。

実感的にわかる。

テレビは完成なんかしていない。

完成なんかするはずがない。日々動いているのだ。ただそのことは残念ながらゲンエキの人たちにはよく見えていないんじゃないか。彼らは子ども頃から「多くの可能性の中で、たまたま成立してきた一つのカタチ」の中で育ったのだから、無理もない。

簡単に言うとながらの役割は、完成品らしく見える「立派な番組」を見つけて顕彰することではなく(それも大事だが、それはほかの誰かにやってもらうことにして)日常番組の、隅っこで芽を吹いたばかりの、オカシゲなものを見出して、それを慈しむことだ。創った本人さえ気がつかずにいる、粗野で生臭い、しかし力強い可能性の芽に気づかせてやる。新しいテレビはそこから育つ。放送の広大な沃野にはまだ勤め入っていない未耕地が広く残されたままなのだ。

ここにOB・OGの役割がある。若者は現在しか見えないが、年寄りに過去と未来が見えるのだから。

明日待たるるその宝船

鈴木典之

縁起モノ通販の広告で、今年の九星が「三碧木星戌年」で三十六年に一度の最強運だと知りました。三碧木星戌年は小生の星です。力を得て、当会の今後にも願を掛けました。

前号で「日韓中フォーラムの総括を語ると、会は早晩空中分解するのではないか」と物騒な発言をしました。フォーラムの成功で会は認知度を高め、可能性を広げ、同時に社会的責任を負ったように思います。後戻りしては会の名折れとなり、求心力を失うことになりましょう。名球的親睦会か業界横断的行動集団かの、年来の路線選択にケリをつける時が来たように思います。年寄りの茶飲み会では、団塊の世代以下現役たちの心は掴めず、会のジリ貧化はまぬがれないのではないか。

とはいえ、行動集団への道も多岐で、厄介な地ならしも覚悟する必要があります。当会は個人の自由参加で、義務や強制はなじみませんが、どんな集団でも行動性は付きもの、旗振り役、

神輿の担ぎ役、応援役は、参加意欲さえ保てば自ずから決まるでしょう。会としては、その意欲を煽る裏付けを早急に整えることが望まれます。

会を公的存在とするため、NPO法人化を急ぐ声が上がっていますが、NPOは手続きは簡単、しかし維持は厄介です。中・長期の計画も不可欠です。会員への義務や強制も生じます。下部構造、つまり上台がしっかりしていないとたちまち行き詰まります。

NPO化の前提として、同時に会存続の必要条件として、僭越ながら二点に要約して提案します。

一、運営資金の確保。放送業界中心に年間一千万(当面目標)の基金を集め、運営に充てる。(今回のフォーラムをテコに勸進すれば必ずできる)
二、事務局の強化。常勤化、行動報酬を含めた運営内規の設定、会員自由交流拠点化などの機能を備える。

以上、行動計画を策定し、幹事会が音頭をとって短期に集中して取り組む。

最後に、大山代表の統率への誠意を間近で見えてきた一人として次期体制に無関心ではられません。後継選びは小泉の純ちゃんほど気軽な作業ではすまないように思います。

妄言多謝。

ローカルに足場を

各務孝

「どうする放送人の会」といきなり問われても正直、答えに詰まってしまふのが本音です。「どうする」という言葉に込められた切羽詰った設問の背景には恐らく、発足以来十年近い「放送人の会」も今のままでは行き詰まってしまふといった危機感があると思われる。「名作の舞台裏」「人気番組メモリー」「放送人の証言」「インターBEE」など好評を博している事業はいずれ種切れになるのでは、当初から叫ばれていたOB中心ではなく現役放送人の積極的加入、若い世代との交流などが掛け声だけで終わりがちな現状への焦り、昨年の第五回日韓中東京フォーラムで、はしなくも露呈された韓中放送人に比べてわが放送人の著しい高齢化、等々、苛立ちの材料に事欠きません。

しかし、ちょっと待ってください。「放送人の会」発足十年近いといいますが、この十年の歳月をもう十年とみるか、まだ十年とみるかによって、会の将来展望も自ずと違ってくる。私などは生来楽観的なせいも、まだ十年に組します。まだ十年にしては「放送人の会」をみる内外の目も多少変わってきているように見えます。確かに、

この数年、大山代表幹事におんぶにだつこの感があるのは否めませんが、昨年の日韓中フォーラムの成果にも見られるように、もはや「放送人の会」がドラマOB会や放送人セレブの会と誤解されることはなくなりました。

少なくとも、あのフォーラムを通じて、韓中との交流もさることながら、国内の放送現場の人たちとの交流の端緒が開けました。その背景には、村上雅通さん（熊本放送）を始めとする地方局の方々の日頃のたゆまぬ努力があったことはいうまでもありません。こうした視点に立つならば、今後の「放送人の会」は地方からの声をもっと積極的に取り上げて行く必要があるように思われます。放送と通信の融合やデジタル化などに気を取られるよりも、放送の原点であるローカルに足場をおきながら、グローバルに考えることが益々求められるのではないでしょう。

アメーバーのように

今野勉

「放送人の会」のように、ボランティアによって運営される組織は、あまりくつきりした目的を決め過ぎないほうがよいように思います。

「放送人の会」が存在する意味につ

いては、組織を超え、年代を超え、地域を超えるというように、かなりくつきりと「交流」ということが掲げられています。

で、何をやるかについては、そのときのボランティアのそれぞれの考え方が相互影響して自ずと決まってくるというのがよいのではないか、と思つています。

「交流」という言葉には親睦ということも、運動体ということも含まれています。どっちへ行くかは、そのとき集まったボランティアの気持ち次第でいいのではないか、と思つていろいろのことです。

ちょうどアメーバーが多方面に触手を出しながらある一定の方向へ動いて行くように。

私自身は、私を含め各ボランティアの負荷がかかり過ぎないこと、楽しめること、意義が感じられること、の二条件をにらみつつ、仕事を引き受けます。面白くてためになるからやっていると、というところです。

ラジオの現場に手を差し伸べて

石井彰（放送作家）

テレビ制作者には放送局を卒業しても制作現場と関わりを持ち、フリーや制作会社で活躍している人が多い。

では、ラジオ制作者は……と周りを見渡すと、卒業後も制作現場に携わっている人は数える程しかない。この違いはどこからくるのだろうか？

いまラジオの制作現場に、深刻な2007年問題が近づいてきている。ラジオ制作の中心を担ってきた、団塊の世代が次々に退職するからだ。

しかも1973年の石油ショックから、多くの放送局では新規採用を中絶した期間があるため、団塊の世代を引き継ぐべき世代（四五〜五五歳）の局員が、ほとんどいない放送局が多い。このままでいくと、ラジオの制作現場から、豊富な制作経験を持つディレクターやプロデューサーが一斉に消えることになる。

番組の構成、演出、そして選曲もできない若いディレクターの多いラジオの現場が、さらに荒廃することは目に見えている。むろん一朝一夕で、ラジオの制作者を育てることはできない。

ではどうすればいいのか？

放送局を卒業した（する）ラジオ制作者が、テレビ制作者のように現場に携わる仕組みを作ることにはできないだろうか。

放送人の会が、ラジオにできることはたくさんある。

2006 丙戌歳

会員年賀状拾遺

鶴橋康夫

迎春

挑むよに視線突き上げ成がなく

季節にもロスタイムあり銀杏散る

『岩なき者』、芸術選奨文部科学大臣

賞ほか沢山の賞を戴きました。

満作やもつたもなくもありがたや

『ぶるうかなりあ』、DVD発売中

です。柄本明、宮沢りえさんたちをもう

一度、"付録"で僕も出ています。

秋公開の予定の東宝映画『愛の流

刑』(原作・渡辺淳一)の準備中です。

「骨まで愛して」「あなた死んでもい

いですか」というエロティックな裁判

劇です。

花に來て蜜吸う蝶に細き管

になりますかどうか。

耳朶吉で転がすように春の風

赤子泣きタンポポの花笑いおり

祝儀不祝儀、禍福はあざなえる…で

す。

よい年でありますように。

深町幸男

昨年三月、築地聖路加病院で心臓手術を行いました。有難いことに無事終

了。「深町倒れる！」の噂は二、三週間で知れ渡りますが、「元氣だぞ、深町は！」という情報は半年はかかります…人生を、ドラマを、人間を大好きな私です。今年も、ゆっくり一歩ずつ進みます。

新井和子

犬は、狂言ではなぜか「びようびようウ」と啼きます。「吵々」か？吵にはスガ目の意あり。旧年夏、縁内障初期と診断さる。進行性で啼ければ大丈夫、「ただし無理はするな」と。部品が耐用年数切れになりつつあり…

田澤正徳

年毎にことは積まる賀状かな

いっばいやりましょう！

重延浩

昨年は夏と秋に、イタリアで四十日ばかりの日を過ごしました。ドイツの文豪ゲーテが三十七歳で、すべての公職を捨ててイタリアに旅し、文学者としての再生を図ったという道をたどつてみました。

「自分と異質なものに触れて、はじめて自分自身を知ることができる」というゲーテの言葉を追体験し、再生した新年を迎えようとしております。

荻野慶人

濱の真砂は盡るとも 世にシナリオのネタは盡きまじ」 そう呟きながら、僕はDVカメラを愉しんでいます。同窓会や懇親旅行の主役や脇役はスター並み！浅草雷門で「すられた！」大先輩を交番の窓から狙つて、案の定警官に阻止されました。「今年

は特ダネを撮りたい！」が初夢です。

西川章

寒鯉 阿舟

列島に雪降り積むや去年今年

やや寝坊して妻と酌む年酒かな

東に明星地には霜柱

寒鯉の力を溜めて動かさる

賑やかに鳥語降りくる寒の庭

村木良彦

昨秋には、二十五回目「地方の時代」映像祭を開催、お世話になった方々、ご来場いただいた方々には、プロデューサーとして感謝感謝です。

この三月で大学教授の肩書ははずします。ようやく自分の時間をつくれそうで、少しわくわくしています。

村上雅通

公式に確認されて五十年となる水俣病は、今でも混沌とした状況です。川辺川ダム建設問題も大きな岐路にさしかかっています。戦後六十一年、伝えたい事、伝えなければならぬ事を、熊本から発信します。今年もよろしく…

小中陽太郎

「松明の炎の力はいや増しに増し、衰えを知らず。わかりましたか、私にはこのような松明飛脚の駅伝がありました」(アイスキュロス「アガメムノーン」久保正彰訳)

トロイ遠征軍のアガメムノーンの妻クリュタイメストラは、心に夫殺しを秘めつつ、なぜ自分がいち早くトロイの落城を知ったかを、こう説き明かす。

これこそ2000年前の光通信。今日、やれ光通信だ、LANだ、と普及にかまびすしいが、すでに2000年前のギリシャ人は実用化していたわけだ。早さも早さだが、政治による抹殺も大問題だ。だがわたしは、ひとたび構想されたものは永遠だ、と信じている。私事ながら、わたしはNHKで演出した小田実原作のドラマ「しようちゅうとゴム」を持っている。ビデオは消えたが、和田勉が東京でキネコで

とつてくれたのである。和田の直筆の

四十年前の手書きの包装(放送ではない)が残っている。去年、この作品を、脱走兵の記録と共に私的に映写してみて、わたしは、放送とは電波と巨大なビルがなければ放送ではない、と考えてテレビを去ったのはまったくの思い違いであったことを知った。フジテレビのバラエティ番組の新鋭プロデューサーK君は、作品を見て「テレビはまだやることがある。わたしは長生きする」と言った。長生きとテレビがどういふ関係にあるのかわからないが、たしかにテレビほど組織と技術力と政治にがんじがらめになっていくものはない。それでさえ、小さな番組を守るのは、たった一人の決心である。それに小さな応援団がいたらこわいものはない。

石橋 冠

新年の誓い

富山の海辺の某市の市長に、町づくりのひととして「日本一の鉄道模型ジオラマ」を提案したら、即座にGOが返ってきた。三百坪の市有地を貸与するという。相当に無責任な夢想が急に現実味を帯び、なんとも落ち着かない正月を迎えてしまった。

さて、どうしたものか。
ボクは「OSG」という会を主宰し

ている(オジサン系グループ)。

ドラマの現場にいる五十歳以上のスタッフたちの単に飲み会であるが、各セクションを横断しているので、話し合う内容はときに有意義であり、勉強にもなる。自然に参加者も増えてきたので、ゆくゆくは別な意味の「放送人の会」にしようかなんて、高邁な理想を掲げるに至った。

新年の例会で、何げなく鉄道ジオラマの話をした。なんと全員がノツてきて、定年後はそこで働きたいという輩まででてきた。本職そっちのけの盛り上がりで高邁な理想は横におかれてしまった。

さてさて、どうしたものか。
とりあえずは、まず自分の大言壮語癖を戒めようと、神妙に誓いをたてた次第である。

嶋田 親一

きのふはずでにかへすによしなく
あしたはいまだにわがものにならず
ゆえにひたすらけふを生きる
〜 詠み人知らず

今年もよろしくご指導を…

風鈴かたまた馬鈴か知るよしもありませぬが、会員諸兄諸姉の皆様、まずはおめでとございます。

初夢に古里を見て涙哉 一茶

(注) 古里は出身局、製作会社の番組のさまならん。落胆の涙か)

新刊紹介

『KURA (クラ)』

市岡 康子著

KURAとはニューギニア東海上の島嶼でみられる貝の装飾品をめぐる交換の儀式という。島々の一見無意味な奇習にみる神話・呪術概念の底に、人間コミュニケーションの原初的な姿を、さらに言えば方向を見失った現代文明への暗示をみる事ができないか。

つまり「牛山学」による取材仮説およびトロブリアンド諸島をめぐる民族学者マリノフスキーのフィールドワークを手掛かりとして市岡康子はドキュメンタリー『クラ』西太平洋の遠洋航海者』を作った(71年 日本テレビ)。

この書が並みいるテレビドキュメンタリーの類書と決定的に異なるのは単なる苦心談でも裏話でも、映像の補足的な紀行物語でもない、JOURNALS(そのものの書だからだ)。

ジャーナルとはもともと綿密な海洋事情を後続の船乗りたちのために綴る地道な航海日誌を意味している。いわば後に続く若いドキュメンタリー制作者に向けて、ジャーナリズムとは何かを、映像取材のメモ、資料写真などのフィールドワークを通し全ページを自らの取材日誌公開のスタイルから説く実践海洋民族学の書でもある。つまりこの書は、学術を書斎のシニシズムからも現場の実感論からも解き放った見事な「野の学」(宮本常一)として異彩を放っているのである。

(コロンズ刊 2400円) M

お知らせ

第14回名作の舞台裏

連続ドラマ『おしん』

2月5日(日曜日) 13:30~16:30

会場 横浜 情文ホール

(放送ライブラリー6F)

番組上映の後、ゲスト・トーク

ゲスト 伊東四朗 小林綾子

江口浩之(演出)

岡本由紀子(制作)

司会 荻野慶人(放送人の会)

平均視聴率52.6%、アジア、中近東など49ヶ国に放送され「おしんブーム」を巻き起こした作品。雪深い山形の貧農に生まれ、明治かた大正、昭和にいたる激動の時代を生き抜いてきた女性「おしん」の生涯を描くことで、

現代日本の繁栄の裏にひそむ光と影を家族の目から問い直した。今回は歯を食いしばって「おら、まげねえ」といった名演技の小林綾子(少女編)と父親役の伊東四朗を招いてスタッフとともに作品を語るもの。おしんシンポはいくつかあるが、関係者が揃うのは珍しく、興味ある話題が期待される。なお、当日は混雑が予想されますが、会員席は確保してありますので、気軽にお出でください(開場は13時から)。

鶴沼海岸から

19

名誉会長 川口幹夫

寒い日が続いた。特に年末の寒波は

相当なものだった。年の暮れというのにやれ強度偽装マンションだ、やれ証人喚問だ、と聞きたくもない世間の話ですっかり心が寒くなった。加えて年初から続いていたNHK問題もちつとも解決に至らずに年の瀬を迎えることになった。「いい年でなかったなあ」と嘆くのみであった。来年の暮れはカバリと変わって、「ああ、今年はいい年だったなあ」と思う日が来て欲しい。

そう思つて年越しをした。さて、今年はどうか？

わたしたちの命であるテレビ番組はもうちよつと「アツ」と思わせてくれないものか。ああそういう切り口があつたか！とか、テレビが誕生して五十年も経つて新しい発見もしてみたい。残念ながらめつたにそんな場面にお目にかからない。

すべてが新鮮で、初めてお目にかかると、というフレッシュさを今時のテレビに求めても、それは無理というものだ。観客も勿論、先刻ご承知で、そんなすべて新鮮！なんてちつとも望んでいやしない。ホンのチョッピリ新鮮な

ところがあれば「ウワー、これは新しい！」とのつてくれるのだ。

オーバーな言い方をすれば、全体の三〇五%が新しければ「相当新しい！」と喝采してくれるのだ。

どの番組も、どのPDも、自分の作る番組の三〇、新鮮なものをお見せしたい！と思つてくれないか。

三%でも本当に新しい企画や演出であれば、それは六〇%新しいことなのだ。それともう一つ。古いもの、古いことにもう一度、目をつけて欲しい。「そんなものは、もう何回やつたかわからない。今更なんでそんな！」と言いたくなるような、ものやことに目をつけてもらいたい。

どうせ人間の考えることだ。急に面目一新したような企画が生まれるはずがない。Iヶ所だけ新しいところがあれば「オツ！これは新鮮だ！」といつて目を見開く人がたくさんいるのだ。

去年の秋、ニューヨークでやった「平成中村座」の上演をVTRで見つくりした。

「なんだこれは天下茶屋じゃないか！と思ひながら舞台の進行を見ると、これがもう、全く新しい。

第一、ニューヨークに中村座を建ててゐるなんて、新鮮そのものだ。テレビもこれくらいやつてもらいたい。

戌年初夢談義

これもやりたいたいあれもやりたし

某日事務局で顔を会わせた面々による会の今後をめぐる提案、珍案集です。読み流して下さい。

.....

・発足準備期間を含め、この会は10年経った。ということでは皆さん十歳年をとつたわけ。老齢化問題でどのNPOも悩みの種だそう。

・現役以後定年までかの50歳台のキャリア組に照準をあわせるしかない。

・会員総数230名と言えは所帯だ。「事業計画書」ファイルが無いのがおかしい。勧誘パンフレットとは別に早速試案を作ろう。

・「新作の舞台裏」をやれないか。連続ドラマ第一回分を見て欲しいってプロデューサー・ディレクターがいるはずだ。乃木坂の林井ちゃんちへ「コレド」はAV装置完備だ。こっちは評論家じゃねえ、バレンタイン監督なみに「ホメる」

「はげます」路線で現場をサポート。記者会プレビューより成果はあると思うがなあ。各局制作関係者に何かおしよびかけたら？

・大メーカ「寄付講座」みたいにかがセットしたドラマ、ドキュメンタリーの講師派遣ゼミだが、言いつ放しじゃない。制作スタッフ、ホンヤさん、役者など「ゴネつき幹旋サーブ」もあつて寸法。次世代現場に呼びかけよう。

・昔は日テレやTBSやフジ、テレビ朝の横断的ドラスロンがあつたもの。企業秘密だの、アイデアが盗まれるなどという時代でもないのに。

・マスコミ各界の現場キーマンを招いて「ここから話す」式オフレコ・ヒアリング。朝日対NHKなんぞオモイ話がゴロゴロしてると。

・「ソト向きの会」で売ったが、そろそろ「ウチ向き」企画をださなきゃ会員に入るメリットが無いもの。一万円で会報だけ？（笑い）

・「日韓中」にしても制作理念追及のスタンスではいずれ行き詰まる。ウマミがなきや。

.....

・今年秋の日韓中は「光州市」だ。そろそろ「この指とまれ」で派遣団を放送界に呼びかけなきや。・カンヌやベニス是非ハリウッド系の見本市になっている。テレビ・コンテンツもそうなるって。ノン・プッキングな付き合ひ方だ。地方局やキー外の首都圏局は関心をもつてる。

・放送と通信融合の大枠は見えてきた。いよいよコンテンツの争奪戦だ。テレビ局や製作会社間、空中戦時代が目前だ。虚業じみた「ヒルズ族」ボリシークの「ジャーナリズムは要らない」論がいかに暴言で空言あつたか。放送界はヨソ見をしないで本業の原点である職人性や志しの旗を今こそ高く掲げよう。そのために貢献する会じゃないか。

・あつけないハリエモン現象、いや、幻想だった。句会を発足させたら？ 阿舟さん（西川章）はプロだから宗匠にして放送人句会だ。難解象徴句の康夫、叙情のとんこう、腹だめ羊一、その他能ある鷹組が会員にはワンサカいるはず。春になったら（谷・根・千吟行会）てのはどう？

・笑うけどカラオケ再評価もアリだ。驚いたよ、ドナリ系、もたえ系、みんな達者なんだ。

・グランプリにもっと話題性を。「現場人による現場のための個人選奨」の賞の個性を訴える。

・作品のスケールメリットや世間的評価にはこだわらない。予定調和な選奨が多い中で鋭角的な性格をもつ賞があつていい。PRも不足。

・夢として「放送人の会」監修・編集によるメディア大衆誌（月刊か季刊）企画をどこかの出版社へ持ち込む。教派クオリティー雑誌の線。

・タテマエ論的正義派は要らない。読んで面白くないもの。やわらかい文明批評を秘めたメッセージ性、読ませる文体、なにより知的板読構築論だ。

・問題は運用資金の安定化だ。会費依存で成り立つプテサロンならともかく。ボランティアのNPO団体も今は交通費、食事代負担は常識。金じゃない。プライドの問題だ。

・カーちゃんもうるさい。「こそこそアンタ何やってんのよ」（笑い）浮気？って怪しまれてる。

・日韓中の実行力で評価された実績を生かさない手はない。播かぬ種ははえぬ、それが結論だ。そろそろお開きにして場所かえて飲もうや（で三三五五解散となりました）

.....

『名作の舞台裏』

『aneegooアネ』

(制作 日本テレビ 05/4、6月放送)

開催 11月21日 横浜 情文ホール

ゲスト 篠原涼子(主演)

中園ミホ(脚本) 樋山裕子(制作)

司会 石橋 冠 (放送人の会)

例えば『夢千代日記』や『崖辺のア
ルバム』などの「古典」もあれば比較
的最近の話題作(例、『蔵』『黒革の
手帖』など)も視野に入れる。すると
会場に面白い現象を発見する。

「古典」の場合は、場内は懐旧的な
「鑑賞」感で覆われ、同世代らしき老
婦人たちの「あら、八千草薫さんって
お若いわねえ」と溜め息にも似たどよ
めきが一齐に起こったりする。

ところが比較的新しい作品、例えば
『黒革の手帖』では同じ女性層でも4、
50代のドラマ好きが目立ち、ゲストの
米倉涼子・山本陽子の新旧ヒロインの
着こなしを見比べたりしている。

『aneegooアネ』になると
客層はさらに変化した。催しは出演者
の都合で月曜日(休館日)で入りが危
ぶまれたが杞憂だった。会場には明ら
かにネットで示しあわせかけつけたよ
うな職場の30代然とした女性たちが大
半。第二部のトークで石橋冠(司会)
が質問者を指さすと「わたし、今日は
会社をサボって来ました」で場内は爆
笑した。次のその次の質問者も軒並み
ズル休み組だと告白する。一体いまの
会社はどうなってるんだ!

多様な役割をこなして人気の高い篠
原涼子が出席、という魅力もあろう。
それ以上に彼女たちに感情移入させた
サムシングがドラマにはあったに違
ない。それでなければ「反冬ソナ」的

(と思う) 職場の女性たちが平日の昼
間に大挙して押しかけるはずがない。

ドラマの内容は社内不倫模様をか
らませつつ、派遣、契約、正社員、そ
れも総合職と一般職が混在、競合する
最近の会社組織にみる微妙な人間関係
に触れ、残業後のアフター5は行きつ
けの立ち飲み居酒屋で職場のうっぶん
ばらしが続き……といった東京駅近辺
のビジネス街をめぐる風俗ドラマだっ
たのはご存じだろう。

ゲストの中園ミホ(脚本)は林真理
子の原作からドロドロ性を脱色し、む
しる職場の環境で心理的にゆれる彼女
たちを留意したと語っていた。

負け犬感にこだわる膨大な層を推し
置り、滑稽と皮肉と優しい悪意をまぶ
したドラマに仕立てた。「数字」も悪
くはなかった。印象的だったのは、突
然立ち上がった女性が開口一番「わた
しは妊娠8ヶ月です」と事情のありそ
うな彼女「輝いている人におなかを撫
でもらうと、立派な赤ちゃんが生ま
れるって聞いてます。篠原さん、撫で
てくれませんか」。どっと爆笑の中、
篠原、さっと会場席に駆け登り、彼女
の腹部を撫で撫でした! 拍手万雷は
いうまでもない。

雑感II 「古典鑑賞」だけでなく、コ
ア的ファンを集めた話題作で視聴動向
の変化を測る試みは貴重である。

◆第7回 パネルディスカッション
『放送とインターネット』ジャナ
リズムの未来を担うものは誰か』

開催 11月17日 (幕張メッセ)
出席 神保哲生(ビデオジャーナ
リスト) 下重暁子(エッセイスト)
音 好宏(上智大学助教授)
司会 今野 勉(放送人の会)

放送と通信の融合で最大課題はジャ

ーナリズムの位置付けだ。情報流通の
メディア独占が崩れ、誰でもが発信者
たりうる時代に予想される難問をどう
着地させるか。論点は公共性と市場性
がどうバランスをとって両立できるか、
プロとアマの違い、ブログ社会で氾濫
する取材や情報への信頼度など、核心
に迫る論議が活発になされた。活字文
化優位のテレビ初期には「一億総白痴
化」への揶揄や危惧もあったが、やが
て映像のジャーナリズムを曲がりなり
にも確立した前史を例とし、問題は真
実を追及する取材倫理を市民相互の社
会倫理として確立することが論議の先
に大きく横たわっていると、アメリカ
のジャーナリズムの最近の変質などを
例証にして論議は活発に白熱化した。
雑感II テーマが「2005国際放送
機器展覧」に集まるビジネスマンの関
心をとらえ、いつになく動員力を示し
ほぼ満杯の会場だった。会場立地に特
化したさらなるテーマ性の模索が考え
られよう。

第3回 会員間 シンポジウム

ゲスト 桜井 均
表題 「わたしは貝になりたくない」
座長 中澤 忠正

セミナーや催しも大事だが、テーマ
を決めて会員同士がそれぞれに問題意
識をもちあって語り合う集まりもあ
っているのではないか。横沢彪、今野勉
に続いて今回は、反響を呼んでいる大
著『テレビは戦争をどう描いてきたか』
(岩波書店)をものした桜井均氏を招
いた。(於 渋谷スタジオ 12月10日)

例えば、「天皇」と「靖国」「従軍
慰安婦」…60年の原点をめぐってつ
きつけられた「戦争」と日本、および
日本人をテレビは、じつは加害と被害
の二項対立か、二項併記の自縛自縛の
視点からしか描いてこなかったのでは
ないか。テレビは戦争をどう描いて、
どう描いてこなかったか。膨大な作品
系列から長い検証の旅は続く。そして
「なぜテレビは戦争を描いていかなけ
ればならないか」という映像記録への
架橋をアーカイブ的手法で丹念に追及
し課題の重さを訴え、「貝になる」時
代風潮を批判した書だと理解した。

「制作者名、作品の位置付けをあえ
てしない根拠とは?」「60年経って世
代間に風化著しい戦争観にたいしてテ
レビは果たして有効か」などと質問
というより、時代にコミットしてきた
会員たちの自問が行き交い、短い時間
で着地点を見いだせるわけもなく、し
かし戦争のもつ原罪性に踏み込んだ
「作品」への期待を、いわば横議のか
たちでしめした2時間だった。

付 「後世の物知り人の考へ定めた
るは、中々から心のさかしらのみ多
くまぢりてふさわしからず、うるさか
し」といって本居宣長は「海づら山が
くれの里々まで、あまねく尋ね聞き集
めて、物々もしるし置かましきわざ」
とした(「玉勝間」)。まさに「から
心のさかしら」(亜流調査報道) 跋扈
への映像批判の書であろう。

会員18名が参加、関心の大きさをし
めし、盛会裡に2次会(忘年会)にな
だれ込み、談論風発の一夜で……

(文責 松尾羊一)

今年も様々な催しを用意します。気
軽にご参加、旧交を温めては如何。

ラジオの広場

特集 団塊世代とラジオ

(構成と編集 石井彰)

ラジオ復帰の団塊世代をねらえ!

児玉久男

映画『ALWAYS 三丁目の夕日』を観た。西口良平氏の原作コミックのファンだったこともあって、久しぶりに映画館に足を運んだ。「ああそうそう、あんなことがあった」と自分の子供時代を思い出しながらジンワリと心が温まるのを感じた。

映画の時代背景は昭和33年、日本が大きく変わり始めたころである。冷蔵庫が初めてわが家に登場した日、電気を入れて空っぽの庫内に顔を突っ込んだ。そしてテレビがやって来た日、近所の人たちが集まる中で、おもむろに観音開きの扉を開けた。

「少年マガジン」「少年サンデー」が創刊したのは昭和34年である。漫画の魅力にとりつかれた子供たちは大人になってもコミックを読む習慣から離れられずにいる。団塊の世代が子供のころは、衝撃的な「初めて」がたくさんあった時代である。

最も大きな衝撃はやはりテレビであろう。居間の一番いい場所にドンと鎮座した。一家に一台、居間にあったラジオは主役の座を追われてしまったのだが、場所を変えて生き残った。トランジスタ・ラジオが開発され、パーソナルなものに生き残る道をみいだした

のである。中でも深夜放送を中心にラジオが若者文化を生み出していった。

「オールナイトニッポン」(LFP)

「バックインミュージック」(TBS)

が1967年に、「セイヤング」(QR)

が69年にそれぞれスタートした。

語りかけ口調でメッセージと音楽を連打するニューラジオの文体があった。

青春時代を深夜放送と共に過ごした

団塊の世代800万人が今、還暦を迎えようとしている。激動の時代を走りぬいてふと辺りを見渡してみる頃合いだ。そこに再びラジオの活路と再起の一翼が見えてくる。

この世代の人からよく聞く言葉が

「最近見たいと思うテレビがないんだよ」「寝床でよくラジオを聞くようになった」などなどである。

団塊の世代は基本的にラジオの楽しみ方を知っている。ラジオの楽しさの一つは1対1の疑似コミュニケーションにあるが、団塊の世代はそのコミュニケーションを心地良いと思える感性をもっている。それに対し、iPod

d世代はレスコミュニケーションに居心地の良さを感じているように思える。この両者がそろって楽しめるラジオ番組を制作することはなかなか難しい。

しかし、ラジオに復帰してきた団塊の世代をとり込んでいく工夫が急務となっている。団塊の世代をターゲットにする場合、「懐かしさ」ばかりに重きを置くと先細りする。そして大切なのはテンポ。若いころ好ましく思えた速いテンポにはついていけない(実感)。

この二つを心に置いて取り組みたい。(山梨放送ラジオ局次長兼制作部長)

『ちよつといい夜』

大人のトークの楽しさを

山下真須美

団塊世代より少しばかり年上の私は子供の頃、外遊びに明け暮れ、家に帰るとラジオの前に陣取り「笛吹童子」や「ヤン坊・ニン坊・トン坊」などのドラマから落語、プレスリーをはじめとするポピュラー音楽、映画音楽、デビュー間もない石原裕次郎のデスクジョッキーまでありとあらゆる番組を聞き、私の中に「文化」が出来あがっていた。その中にも子供心にも独特なトーンの「たずね人」に戦後の日本の時代の空気を感じとっていたものだった。ラジオの全盛期を過ごしたが故に放送の仕事でもテレビよりラジオに魅せられていた。

そんな私がいよいよ定年目前に、『ちよつといい夜』(ナイターオフの毎水曜日 夜8時~9時半放送)をスタートさせた。

スタジオに置き炬燵を設け、おいしいお酒とおふくろ料理(調理はレギュラーの相澤節子さん)でゲストを迎え、炉辺の茶のみ話をねらう趣向。

ゲストは地元で活躍する話題の人や県内在住の例えば、まつもも市民芸術館館長で演出家、俳優でもある串田和美さん、安曇野ちひろ美術館長 松本猛さん、報道写真家の石川文洋さん、諏訪中央病院 鎌田実さんの皆さん。

県外からも私と高橋さんのネットワークを生かして小室等さんがよくやってくる……。皆さん、スタジオに設けた椅子式炬燵を囲み、ワインやお酒におふくろ料理のあるくつろぎの空間で

進めるといふ風変わりな、全国でも珍しい番組だとキー局の見学もくる。年を重ねた自分もそうであったが、

周りの人から「見たい番組、聞きたい番組が無い」という声をよく耳にするようになっていた。生ワイドやドキュメンタリーも手がけてきたが、結局のところ私がおもしろいと感ずるのは、「人間」であり、「人の話」であり、短い時間では決して引きだすことのない人間味をゆっくりと味わえる大人のトーク番組を作りたいと思った。

相手のパーソナリティーは、松本浅間温泉にある神宮寺住職でまさしく団塊世代の高橋卓志さん。

障害者の支援、チェルノブイリ原発事故の医療支援をはじめ、寺の在り方を問い、檀家の人たちと日に積極的に関わるという行動力があり、自由な発想の人。宗派は「皆の衆」であり、住職ではない、各地を飛びまわって「飛び職」だと称している。檀家仏教を批判、民衆の中の仏教を、という実践家でもある。

番組では、生きること病むこと、老いることをごく日常のこととして話題に、弾き語りや本の話題などさまざまに飛ぶスローライフ番組。

かつてラジオで育った団塊世代を折り返し地点で迎えるラジオというイメージネーションの世界に取り込むことが出来たら……。ラジオの可能性を信じ、ラジオと共に年を重ねて行く、そんなラジオ番組を、これからも作っていきたいと思っている。

(元信越放送ラジオ局制作部長
フリーパーソナリティー)

（会員による連載）

新連載 題名のないエッセー

（放送音楽私史）

第一回 『放送音楽の導師・堀内敬三』

磯村健二

今回、戦前の放送音楽から語り始めるにあたって、私が敬愛する堀内敬三氏の活動から紹介させていただく。

堀内敬三といえは音楽之友社の創立者として、また私の母校・慶応義塾の応援歌「若き血」の作詞・作曲者としても知られているが、一般的にはNHKの『話の泉』のレギュラー出演者としてご記憶の方も多いいのではないか。

この堀内敬三が大正15年のラジオ放送開始当初、JKのプロデューサーとして洋楽の番組制作や編成を一手に引き上げていたのである。当時の番組表を見ると、当然のことながら音楽番組のプログラムが多い。邦楽や民謡、そしてこのころ生まれた流行歌（歌謡曲）の放送があるのは合点がいくが、本格的な洋楽（クラシック）の番組が数多く放送されているのは驚かされる。

当時、放送の使命として、「啓蒙」ということが後世以上に重視されていたことに起因するのであるが、それにして時代を考えば意欲的な内容のものが多かった。その代表的な番組に『放送歌劇』がある。

この番組には外国オペラの録音を紹介するのではなく、なんと画期的なことに、毎回生放送で日本の歌手と演奏家たちによって、モーツァルト、ヴェ

ルディ、プッチーニ等の名作の日本初演をノーカットで、しかも驚くべきことに日本語訳で放送していたのである。訳詞は放送のために堀内自身により行われた（当時の訳詞は現在でも二期会などの公演で使用されている）。

明治の洋楽移入期以来、オペラが本格的かつ定期的に演奏されたのは初めてであった。それも大正期の浅草オペラや上野の東京音楽学校の奏楽堂での上演とはレベルが違っていた。

堀内敬三は一八九七年（明治三十年）神田鍛冶町、浅田鉛本舗の三男坊として生まれ、東京高等師範付属中学を経て、アメリカのミシガン大学、マサチューセッツ工科大学で時代の先端、自動車工学などの学位を受ける。帰国後、自動車工場の創設を両親から期待されていたが、堀内は渡米前から交友があった大田黒元雄・野村光一・菅原明朗など、明治文壇の錚々たる洋楽啓蒙家たち（森鷗外、永井荷風、夏目漱石など）から引き継いだ音楽サロンのリーダー格として、音楽評論・事業の世界で生きることになる。

この連載を始めるにあたって何故、堀内敬三のことに触れたのか、それには理由がある。私が終戦後間もない幼児期に、あの三越劇場のステージで演奏するオーケストラの解説を、花道に設けられた演台で平易かつ、興味深い話し方で行っていたのが堀内敬三であった。その後まもなく傾聴することになったラジオ番組『音楽の泉』は、堀内の

ライフワークともいえる名番組であった。後年、私がテレビ朝日で30年近く携わることになる『題名のない音楽会』の原風景がここにあるからである。

☆ 連載 裏方のわが創世期（3）

橋本潔

テレビ実験放送は、定時的なものではなかったが、番組はNHK技研のアテナから内幸町のNHK本館1階東南角にあった受信相談コーナーに電波で送られ、そこに設置されたテレビ受信機で聴視することができた。その技研のスタジオで面白いものを発見した。演技エリアに向かって2台のカメラとマイクブース、その後ろに1、2段のステップがついた低い台があった。その横には細長くやや高めの木製の箱があり、上蓋に相当するところが斜めになっていて、そこに10インチほどのブラウン管がうめこまれていた。台の上から見やすい形になっている。

「号令台」のようなこの台から、ラジオのようにQを振るためのものとわかった。映画のステージにはありえないもので、この台の存在がテレビはラジオと同じ「放送」なのだということを実感した。さて、定期便バスの時間待ちで帰るわけにもいかず、スケッチブックにスタジオの平面略図や機材の配置などを描き留めることにして時間つぶしをしていた。そのとき声をかけられた。カメラ調整をしていた人である。話によると、このスタジオのなか

には2系統の異なるカメラチェーンがあって、ひとつはアイコノスコープという、NHK技研が開発した真空管方式のもので実験放送の主力だった。しかし、スタジオ内で撮像するには7500ルクスの光量が必要とするという。もうひとつは、イメージオルシコンカメラといい、1948年にアメリカで発明されたトランジスタを多用し、ライターの火でも写るといって高性能なアメリカRCA製。NHKも一年前に急速2台輸入したという。

さらに驚いたことに、中庭の小さな建物ではカラーテレビを研究開発中で実際にスタジオでカラー番組を作られたとも聞いた。カメラを調整する作業も見慣れないものだった。カメラ調整のためにテストパターンに向かっていくカメラの画像は動かない。

「よかったらレンズの前に手を出してもいいですよ」とうながされた。私はBサイズほどの大きなテストパターンの前に、熱いライトを感じながら手を出してひらひらと振ってみた。すると、スタジオにある2台のモニターに同じ動きで私の手が揺れた。これは驚きだった。「このカメラの絵をここに（技研）のアンテナから波に乗せれば何処でも何台でも同時に見えます」と声がかぶる。映画ではありえないことが目の前で起こっていた。

放送自分史を紡ぎたい会員を募っております。乞う一報編集部まで。

放送人グランプリ

「譬え話ふう無責任下馬評談義」

Y 勝海舟のオヤジ（勝小吉）は御家人くずれのあばれ者だった。しばらくは刀の目利きで活計を立てていたが銘刀趣味じゃない。無名刀の値打ちを好んだという（「夢酔独言」東洋文庫）われわれも評論家じゃない。目利きの精神でこの一年の放送をふりかえろう。

めげずに頑張ったNHK

X O5年は何といっても戦後60年関連の特集や番組だろう。とくにNHK。総合や教育、衛星1・2をフルに使い特集の連打だ。どの番組が良かったというより、戦時用語を使えばまさに絨毯爆撃的編成で攻めまくった。

Y 本年度の毎日芸術賞の特別賞を受賞した。だからパスってわけにも。

Z 「あなたと作る時代の記録」の田中直人。「こども」「はたらく」などに分類、膨大な応募テープで構成した。昔は借金の証文やら去り状が襖を破ると出てきた。日本民俗学の第一級資料は今なら8ミリかビデオだ。「わたしにも写せます！」（CM）ではしなくも戦後映像神史が浮かびあがった。家族の記録が多いが、集団就職その後の商店街（桜新町）をきめ細かに描いたものもあった。

Y NHKスペシャル「あの日を忘れないで」日航機墜落事故20年目の遺族「」。ドラマにして地方新聞の取材裏

を舞台にしたのが横山秀夫原作「クライマーズ・ハイ」。若泉久朗だ。大森寿美男（脚本）も。集団演技の中に記者の性格づけが効いていた。

X 「皆なき者」にならぶ、久しぶりの硬派のメディア論型ドラマ。J R西日本脱線事故をめぐるジャーナリズムと遺族との対立とも重なるし、やるじゃないかNHK。これは買いたんだが、大山勝美（毎日）を除き反響が今ひとつなのはなぜだ。

Z いわゆる識者ってやつはテレビ見ないもん。とくにドラマは。

X 制度論やNHK問題、民営化論議には口を出す割にテレビが好きじゃない。日本のメディア論の悪弊だ。

W 8月7、8、9の3日間を使って第2次大戦の無差別爆撃を世界的視点から検証した。「こうして日本は焦土となった」都市爆撃の真実」「ZONE」核と人間」とはチェルノブイリの原発事故で生まれたZONEから「追跡 核の闇市場」の実態も。

Z 「特集 あの日 昭和20年の記録」著名人の8・15の思い出。「この日の朝から晩まで、いろいろな場所できざまな出来事があった。その話を綴って行く」と日本人にとっての8・15が立体的に見えて来ます（大野了CP）

Y NHKはそれぐらいにして役者。俳優・タレントでは？

X 断然薬師丸ひろ子だ。映画だが「ALWAYS 三丁目の夕日」に未公開映画「仰げば尊し」。テレビドラマは「1リットルの涙」「ウメ子」。

セーラー服が似合った彼女が貧しい家のしつかり者の母親役、これがいい。往年の京塚昌子だ（笑い）。

X 篠原涼子。「溺れる人」のアルコイル依存症、自閉症の息子の母親役があって「anegokoアネゴ」。

Z 天海祐希も。「離婚弁護士」のエリート・ミラー役は昔のハリウッドコメディのタッチ。加えて「女王の教室」。「いい加減、目覚めなさい！」の教師像は誤解されやすいが、不透明な教育行政を衝いている。そこを黒づくめの彼女が切ると説得力がある。

Y TBS好みの黒木瞳だが、好感度ナンバーワンにしてはこれといったカードが、すこみが無い。テレビお嬢様「なんだ。そろそろ大化けしてくれ。Y 男は佐藤浩市。「新選組！」の芹沢鴨は一昨年だが、「クライマーズ・ハイ」の記者悠木役。インテリ記者でもやくざタイプでもないが、頂上を見て我にかえり転落する記者、分かるんだなあ、アイツって（笑い）

X SMAPのバラ売りドラマが目立つのは今はじまったことではないが、タレント名と「役」がいつもシンクロしてる演技。若年視聴者にはそこがタマランのだろうが。

Z 僕は「タイガー&ドラゴン」を推したい。磯山晶とクドカンの仕事。突如落語ブームを呼んで、新宿末広亭なんか若者で行列ができて。「池袋WGP」「木更津キャッツアイ」「マン

ハッタン・ラブストーリー」のアンチ予定調和のクドカン・ワールドに一票。

その他傑作佳作を拾うと……

Y ちょっと俳優編に戻るが渡哲也は？ 倉本聰の「祇園囃子」に「熟年離婚」で熟年役者が孤軍奮闘した。

Z でも「祇園囃子」は期待はずれだった。日米安保の軍事的側面、防衛庁とアメリカの裏関係を新派大悲劇でからませるって、やっぱ無理だよ。

W VIPをめぐるものものしい警備場面は、金正日総書記の訪中の中国側警備報道を見てナルホドと思ったよ。

X アノ人、どんなドラマに出ても「オレは渡哲也だ」になっちゃう（笑い）。松坂慶子が別れたらってストリーはよく分かる（笑い）

W 「黄落、その後」は「老親老護」の赤裸々な現実を小林桂樹。

X それもあるが、山田太一の「やがて来る日のために」でも市原悦子だ。

Y 子役大活躍を挙げたい。神木隆之介（あいくるしい）や村上茉愛（ウメ子）などはまさに「子世恐るべし」だが、ヒ孫世代にGPってのも（笑い）

Z ドキュメンタリーでは「山小屋カレ」もだが、僕は「くもりときどき、晴れ」の寺尾隆（南海放送）だ。

Z さて結びだ。ま、当てにならないリストアップで恐縮だが、おあとは今年度のグランプリ選考委員の皆様におまかせするとして、会員の皆さんも一票を、ことに触れ考えてください。

（以上は編集部が折にふれ耳にした会員の「世論」を座談形式に再構成したものです）

放送人の証言 (その13) 放送現場 司令塔の人びと 構成 久野浩平

「放送人の証言」は七年かけ、今年で記念すべき百人目を数えました。

今回は、編成、経営のいわば司令塔の立場からラジオ、テレビの文化を創った放送人を中心に集めてみました。

まず、北川信さんです。

北川さんは一九五三年七月NTVに入社、翌月が開局のため一カ月でテレビディレクターになります。五七年から警察ものセミドキュメンタリーシリーズ『ダイヤル一〇番』の制作・演出を七年間担当、その後編成に転じます。七二年、浅間山荘事件に際して、編成責任者として番組やCMを次から次に飛ばしながら中継を続けた生々しい「証言」には迫力があります。その後テレビ新潟の社長に就任してからは、キー局とローカル局の問題、テレビとインターネットの関係などに没頭、話題もそこに集中します。

「お客が何を欲しているかなんて考えもしない時代だった。俺が何を欲しているかを考え、俺の欲しているものを作ったらみんな喜んでくれた。というのね、それだけ世代感覚にギャップがなかったということですよ。つまり産業の年齢と個人の年齢が完全にシンクロしていたということ、その素晴らしさは今だって二十代のスタッフはそう思っているんじゃないか」

次は村上七郎さんです。村上さんは共同通信の記者から五四年開局と同

時にニッポン放送報道部に入社、五五年からは編成課長として「サザエさん」に代表される多数の子供向けドラマや帯ドラマの編成で局の特色を出します。五九年、フジテレビ開局で編成部長。

『日々の背信』（岡田太郎）を始めとする昼のメロドラマ、『ちびっ子のど自慢』『三時のあなた』などの編成で『母と子のフジテレビ』を目指しました。村上さんの「証言」は率直です。七一年に試みたプロダクション部門

分社化構想の目的と失敗、その後の長いフジの低迷。テレビ広島に意向していた村上さんが八〇年専務として復帰、分社化を解消した経緯を闊達に語られます。村上さんはその後、関西テレビの社長も勤めました。いささかベランメー調で語られる「証言」には、制作者たちへの深い愛情を感じさせます。

「僕は専務で戻った時も専務室など使わなかった。大広間のご真ん中に座ってた。そうするとほら、五社ちゃん（英雄、故人）なんかそこらにいるもんだから話はパッパ、パッパときまっていくわけ（中略）『三匹の侍』なんて横でごちゃごちゃ言ったけど、面白れえ、やるか。そんな雰囲気だった。企画書なんか無いよ。書けねえもんあいつは（笑い）第一……」

斎藤守慶さんは毎日新聞出身。新聞より放送に魅力を感じ五五年、開局したOTV営業部に移ります。五八年OTVがMBSとABCに分離して斎藤さんはMBSに入社します。斎藤さんの「証言」で興味深いのは、TBSとのネット問題です。OTV分離の時、MBSは同じ毎日系と思ったTBSに

番組のネットを拒否され、開局を数カ月延期、結局NET（現テレビ朝日）とネットを組まざるを得なかった事情、そして七五年「腸捻転解消」にあたり、今度はTBSとネットを組むことになり紆余曲折が語られます。斎藤さんは制作現場、テレビ、ラジオ、事業など放送のあらゆる分野を経験、ついに社長、会長を勤めあげました。

「（大阪の制作は）今はほんとに駄目になりましたね。何しろ吉本が半分こっち（東京）に来て、吉本所属のタレントにはギャラ増して払わなきゃならんのですよ。あの三枝にしてもさんなまにしても。ほんとにもう（中略）まあ、しかし、大阪の制作力はこれからは昔のように強くないと……」

さて小田久栄門さんです。小田さんは五九年開局と同時にNETに入り社会教養番組のディレクターとして多くの海外取材を経験します。六八年から『木島モーニングショー』を担当、七七年編成部長でCNNとの独占契約を果たし「朝まで生テレビ」「サンデープロジェクト」などの情報番組の開発に努めます。風雲児といわれた三浦甲子二専務との信頼関係、その三浦さんが放送界を震撼させた八十年のモスクワオリンピック独占契約についての秘話など、小田さんの「証言」は興味を惹かれます。そのあと報道局に移って「ニュースステーション」を制作、その立ちあげ、久米宏起用の裏話など、これまた貴重な「証言」です。

「テレビとは一体何かって問われると、やはり私は報道と情報だと（中略）編成に私の企画を真っ向から出し、主

張すると、みんな総反対。ところがそれがみんな不思議に数字が良くて反響も随分あって局イメージにつながった」

川平朝清さんの「証言」は一般にはよく知られていない沖繩放送史の貴重な記録です。NHK沖繩局のラジオ放送は四一年開戦のニュースとともに始まったのですが、四五年、戦火の中で崩壊します。台湾育ちの川平さんは郷里の沖繩に戻り、五〇年米軍の援助で再開したラジオ局「琉球の声」に入社します。五二年から五七年まで放送研究のためアメリカ留学、帰沖後「琉球の声」が発展、開設した商業テレビRBC琉球放送に改めて入社します。沖繩返還の動きが見えはじめた六七年、琉球政府による公共放送OHK（沖繩放送協会）の設立が計画され、RBCが再開されたのです。放送開始前のNHKに一体化してNHK沖繩放送局が再開されたのです。放送開始前のNHKの検閲事情や講和条約を挟んでのNHK番組取り扱いの変化など、興味尽きない川平さんの「証言」です。

「沖繩にあるテレビは、OTV一波、RBC一波、それにNHKが二波もっています。そしてそこに米軍のテレビがあるわけですから、沖繩では少なくとも五波見られるわけです。その五波体制で見られる番組ちゅうのは、アメリカから衛星で来ているわけ出すよね（中略）ですから沖繩にいとテレビまで米軍がやっていると、米軍がその状況について日本では電波法では一体どうなっているんだろうという気はしますね」

◆号外！『放送人の世界』 鄭秀雄・人と作品（絶対おもしろい！ぜひぜひご参加を）
 3月18日（土）13:30分～17:00 & 3月19日（日）同時開演（場所 横浜放送ライブラリー）

会員名簿 06・1・20現在

- (あ) 合川明 青木裕子 赤井朱美
 秋田完 新井和子 有馬哲夫 (い)
 石井清司 石井ふく子 石井彰
 石高健次 石橋冠 磯野恭子
 磯村健二 市岡康子 一色伸夫
 伊藤雅浩 井上良介 岩澤敏
 岩下恒夫 (う) 上田千秋 碓井広義
 歌田勝彦 宇野昭 生方恵一
 浦田彰 (え) 江口展之 遠藤利男
 遠藤ふき子
 (お) 大蔵雄之助 太田敬雄
 大西康司 大西文一郎 大原誠
 大原れいこ 大山勝美 大類啓
 大脇明 岡弘道 岡崎栄
 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明
 沖野瞭 荻野慶人 小田昭太郎
 小田久栄門 (か) 加賀美幸子
 各務孝 片岡敬司 片島紀男
 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫
 金沢敏子 兼蔵正英 金平茂紀
 加納孝夫 上安平冽子 鴨下信一
 河合肇 川口和久 川口健一
 川口幹夫 川竹和夫 川平朝清
 河邑厚徳 河村正一
 (き) 岸田功 北川泰三 北川信
 北出晃 北村美憲 北村充史
 木村栄文 木村成忠 木村忠夫
 木元教子
 (く) 楠美昌 工藤英博 国枝忠雄
 (こ) 児玉久男 児玉孝光
 後藤多聞 小中陽太郎 近藤晋
 今野勉 (さ) 斎藤伸久 齋藤守慶
 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正
 坂元良江 桜井均 桜井元雄
 迫田朋子 佐々木欽三 佐々木彰
 佐藤年 佐藤利明 沢口真生
 澤田隆治 沢田隆三
 (し) 重延浩 静永純一 渋谷康生
 嶋田親一 清水満 下川靖夫
 下重暁子 習田豊 城菊子
 (す) 菅野高至 杉澤陽太郎
 杉田成道 鈴木昭典 鈴木道明
 鈴木紀郎 鈴木典之 須磨 章
 せんぼんよしこ (そ) 曾根英二
 (た) 高島秀之 高橋一郎
 高橋啓 高橋泰 滝大作
 武谷雅博 田澤正稔 只野 哲
 田中昭男 田原英二 田原茂行
 (ち) 千葉勉
 (つ) 露木茂 鶴橋康夫
 (と) 土居原作郎 戸田桂太
 外崎宏司 富永卓二 土門正夫
 (な) 中崎清栄 中澤忠正
 中島 僚 中田美知子 中谷英世
 中津川輝夫 長沼士朗 中村敦夫
 中村克史 中村季恵 中村耕治
 中村美美子 永守良孝 難波秀哉
 (に) 西川 章 新村もとを
 西ヶ谷秀夫 丹羽美之 (の) 野崎茂
 野添泰男 野田宏一郎 信井文夫
 (は) 萩野靖乃 橋口義春 橋本潔
 林勝彦 林健嗣 林裕史 原由美子
 原田庸之助 (ひ) 菱田市彦
 備前島文夫 久野浩平 一杉丈夫
 (ふ) 深町幸男 福田雅子 藤井潔
 藤井チズ子 藤代勝博 藤田晋也
 藤久ミネ
 (ほ) 星田良子 堀川とんこう
 (ま) 松尾羊一 松田輝雄
 松平定知 松前洋一 松本明
 松本修 松本国昭
 (み) 三上義智 三國 章 水上毅
 水野憲一 満島保夫 三村景一
 三村千鶴 宮川鏡一 宮脇敏雄
 明神正
 (む) 村上純一 村上憲男
 村上雅通 村上佑二 村木良彦
 (め) 銘苅栄昌 (も) 桃井 章
 諸橋毅一 (や) 矢島良彰
 藪内広之 山泉昭彦 山崎隆保
 山崎 裕 山路家子 山田良明
 山田 尚 大和定次 山名光紀
 山根基世 山辺麻未 山本恵三
 (ゆ) 湯浅和憲 (よ) 横沢 彪
 横山英治 吉永香子 吉村直樹
 吉村誠 吉村光夫
 (わ) 和田智允

作品『在韓日本人ハルモニたちの戦後』『百一年ぶりの追跡閔妃殺人事件』『カムチャッカの北朝鮮人たち』『太平洋戦争 最後の外務大臣東郷茂徳』(いずれも日本語スーパ入り)

編集後記

「名作の舞台裏」の客層は8対2の割合で圧倒的に女性客、それも齢の割に皆さん、お若い◆オヤジギャグの開祖 戸板康二はかつて「四十にしてマドモワゼル」「老婆は一日にして成らず」の傑作を残した◆エステ、ダンスにヨソ様の3点セットでテキは精進を惜しまない。その成果か、「塾年離婚」などと心にもないテレビフレーズをもてあそんでいる◆そこえゆくとジジイは(とくに陸にあがった河童的マスコミ・ジジイ)は屈折している。「いつみてもさてお若いと口々に／ほめそやさるる歳ぞくやしき」とヒガむ◆かくてはならじ06丙戌年、会員平均年齢、限りなく七十の舞台に近い現実を前に破れかぶれの「家事場の糞力」でハレハレ婆さん連に対抗する年にしたいもので◆それだけでなくアジア孤児のさなか、靖国と憲法改正に増税の三本柱だというのにテレビは妙に浮かればばなしの画面ばかり◆いたずらに過ぐる月日も面白し／花みてばかり暮らされぬ世は(蜀山人) っていうじゃない？ 花テレビなら、それは生気の無い「造花」なのかもしれません。(M)